天使
Tenshi College
vol.13 MARCH 2007

天使大学は地域社会との連携を大切にしています

特集
地域社会との連携

天使大学は開学以来、地域社会とのさまざまな取り組みを続けてきました。看護・栄養分野等に関する研修会・講演会への講師派遣、地域住民を対象とした公開講座、地域社会に根ざした研究活動、高等学校への出張講義等、多様なかたちで地域社会との連携を大切にしてきました。今回は、こうした取り組みの一端をお伝えします。

「札幌市東区」と「天使大学」との連携について

研究代表者・看護学科教授（学科長）　菅原　邦子

研究成果を地域住民の「健康づくり」に還元できるように

札幌市東区にある唯一の医療系大学である天使大学看護栄養学部の研究チームは、昨年より東区住民、東区保健センター（行政）との協働による、「大学と地域とのパートナーシップによる地域健康づくりシステム形成に向けた研究」に取り組んでいます。

2006年度は、地域住民と行政との連携を図るため3つの活動を行いました。6月の大学祭では、学生による健康審査と保健センターの保健師による保健相談、健康づくりの取り組みや食に関するパネル展を行い、住民と学生が東区音頭を踊り交流を深めました。9月には、「東区健康フェア」に参加し、大学と住民との交流について紹介しました。3月には、東区健康づくり連絡協議会との共催による「東区健康づくりフェスティバル」を本学体育館で開催し、大学院看護栄養学研究科の斉藤昌之教授による「肥満とメタボリックシンドローム」の講演を行いました。

「2006年東区健康フェア」では天使大学のパネルが展示されました

東区（10地区）の住民は、札幌市の中でも地域住民の「健康づくり」に関するさまざまな取り組みを保健センターと連携しながら積極的に展開してきた歴史を持っています。研究チームの研究活動は、地域住民の「健康づくり・食生活に関する活動や健康ニーズ」について、2地区の「健康づくり」「食生活改善」に取り組んでいる住民の協力を得て聞き取り調査を行っています。これまでの調査から、住民パワーに感動するとともに、地域の方々が天使大学に期待する具体的な内容も見えてきました。研究成果を地域の「健康づくり」に還元できるように進めて参ります。

「東区健康づくりフェスティバル」で講演を行う大学院の斉藤昌之教授

道内高等学校への出張講義も積極的に行っています

総合学習の時間を利用して天使大学を訪問し、講義を受ける高校生たち

天使大学では、高大連携の高まりから、主に北海道内の高等学校からの依頼に応じて出張講義を行っています。「今、看護職員に求められていること」「健康と食生活について」など、高校生が興味を持ちやすい講義内容をいくつか設定し、道内高等学校に広く呼びかけています。2006年度は19校で出張講義を実施し、高校生の進路選択、職業観を深めるよい機会となっているようです。また、こちらが高等学校に出向くのではなく、高校生が本学を訪問して講義を受けた事例も多数あり、2006年度は13件（うち中学校3校）を数えました。

過去5ヵ年の高等学校への出張講義実施状況

年度	実施校数
2002	14校
2003	18校
2004	17校
2005	17校
2006	19校

特集
地域社会との連携

肥満と病気、そして「健康栄養クリニック」の役割

大学院看護栄養学研究科教授　関谷　千尋

メタボリックシンドロームの改善・予防のために

日本人は遺伝的にみますと飢餓に耐えられる民族とされます。このことは成長期や重労働などの場合を除きますと、壮年期以降の人は少なめにみえるカロリーの摂取で十分といえ、おいしい洋風化した料理を取り過ぎると肥満になります。しかも運動する場所や機会もなく、日夜仕事に追われる人たちの運動不足は非常に深刻です。この飽食と運動不足の結果が、ここ最近の流行語でもあるメタボリックシンドロームです。この病態は、これといった自覚症状はないのですが生活習慣病といわれる糖尿病や高血圧などを発症・増悪させ動脈硬化を進行させます。そして最終的には心筋梗塞や脳卒中をもたらし、その人の人生や家族を台無しにするのです。

人間にはもともとおいしいものを食べたいという本能が働いています。しかも、ストレスが加わりますと、その解消のため〝やけ食い〟が生じます。しかも肥満の解消には、消費するエネルギーより少ないカロリーでバランスのとれた食事をするしかありません。世の中に氾濫するダイエット方法の多くは危険に満ちています。残念ながら今は食べたい本能とさまざまなストレスに立ち向かうしかないのです。この飽食や運動不足の習慣を正すことは容易ではありませんが、私たち天使大学大学院看護栄養学研究科では昨年40名を対象に4ヶ月ほどにわたる栄養指導と運動指導を教授たちが中心に行い、大きな効果を挙げました。集団で仲間を作って、少し長めに、正しい指導を受けながら自らの生活習慣を正すことが必要なのです。一人で悩まず集団に加わって、楽しく病気から離れましょう。

◆メタボリックシンドロームの診断基準……腹囲男性85㎝以上、女性90㎝以上のほかに①中性脂肪150㎎／dl以上かHDLコレステロール40㎎／dl未満②収縮期血圧130㎜Hg以上か拡張期血圧85㎜Hg以上③空腹時血糖110㎎／dl以上のうち2項目以上該当する人。1項目該当する人は「予備軍」です。

「健康栄養クリニック」とは？

2006年9月から4カ月間にわたり、40歳以上の男女40名に対し、アディポサイトカイン（脂肪細胞から分泌される生理活性物質）等の血液検査、体組成測定などを行い、その詳細なデータをもとに、一人ひとりに合ったオーダーメードの栄養指導・運動指導を行いました。その指導にあたるのは大学院看護栄養学研究科の教授陣で、医学・栄養学・健康運動学など多角的なアプローチから、メタボリックシンドロームに対する効果的な改善・予防策を提示しました。「健康栄養クリニック」は今後も活動を継続していく予定です。

紋別市での講演「地域・人・交流」で伝えたかったこと

教養教育科教授　田島　忠篤

紋別の魅力は「自然の恵み」と「人情」

私は看護学科・瀧断子教授、栄養学科・高野良子助教授たちとの共同研究「積雪寒冷地における独居高齢者世帯の健康支援に関する産官学共同支援ネットワークの形成に関する基礎的研究」（平成17年度北海道開発協会開発調査総合研究所研究助成）および「積雪寒冷地におけるITを活用した高齢者健康支援プログラムの開発」（平成17～19年度文部科学省科学研究費：萌芽的研究　研究代表者瀧断子）をきっかけに紋別市とのご縁をいただき、2007年1月12日（金）に紋別市立博物館で「地域・人・交流」と題した講演をさせていただきました。

私は奄美大島に惹かれ、個人的な愛着とともに長年研究対象としてそこで暮らす人々を見つめてきました。そして、紋別を何度か訪れるうちに、奄美大島の魅力に似た不思議な引力を紋別からも感じ取るようになりました。その魅力とは「豊かな自然の恵み」と「そこに住む方の人情」です。オホーツクの大自然に囲まれ、新鮮な海の幸・山の幸を豊富に享受できる環境は、紋別ならではの恵みといえます。また、ともすれば〝おせっかい〟と思えるほど他者とのふれあいを大切にする姿は、特に都市部から来る者にとって、とてもあたたかく映りました。

しかし、そうした魅力は、そこで暮らす人々にはなかなか見えてこないものです。その家独自の匂いがあるのに、自分の家の匂いは毎日のことで気づかず、ヨソ者だけがその匂いを自覚できるのと同じように、外部から来た私だからこそ見えてくるものがあります。そうした魅力を紋別の人に伝え、紋別の生活文化をぜひ大切にしてもらいたいと思い、講演を引き受けさせていただきました。また、もっと他の地域文化にも触れ、その比較のなかで自分たちの文化をさらに深く知り、紋別の魅力を一層熟成してほしいという強い願いも講演の中に込めました。

私の講演が、紋別に住む方々にとってわずかでも自らの魅力を見つめ直す契機となったなら、それに勝る幸せはありません。

《写真提供　オホーツク新聞》

地域住民を対象に「公開講座」を開催しています

本大学では、1990年以来継続して毎年3～5回シリーズの公開講座を開催しています。その目的は、主として専門職業人の教育機関として所有している知識や技術を地域の方々に広く還元すること、日ごろの教育研究の成果や新しい情報を市民の皆さまにいち早く提供することです。

また、この講座は、北海道教育委員会が主催する「道民カレッジ連携講座」として認定され、北海道の生涯教育事業の一環として位置づけられています。

（公開講座委員長・栄養学科教授　古崎　和代）

2007年度天使大学看護栄養学部公開講座のご案内

全体テーマ
いのちみつめて　――健康な暮らしと今日的課題

企画の趣旨
医療保険・介護保険の改正が行われ、これまでの介護中心のサービスから予防重視型へと方向が転換されました。これは、どんな状態にあっても、日々の生活と一人ひとりの人生を尊重した自立支援を行うことや、生活の質の高い活力ある超高齢化社会を目指しているためと思われます。
この講座では、一般市民ができる対処の仕方や工夫などを皆で考えてみたいと思います。

開催日：2007年8月30日～9月20日　毎週木曜日　18:30～20:00
対　象：一般　80名（先着順）　受講料：1,000円（全4回分）

講演内容と講師

	講演内容	講　師
1	日常の暮らしと医療保険（改正部分と改正後の実態）	（北海道医師会からの派遣講師）
2	「活き活きした生活をあきらめていませんか？楽しむこと!! それが介護予防です」	北海道保健福祉部福祉局介護保険課主査 今川 洋子氏
3	食は医なり ―― 薬より大事な食べ物の話	大学院看護栄養学研究科教授 伊藤 和枝
4	現代社会におけるメンタルヘルス（「心のかぜ」と呼ばれるうつ病の増加に、どう対応すればよいか？）	（北海道医師会からの派遣講師）

※講師の都合等により、講演内容・開催日が変更になる場合があります。

特集 性教育

学生が取り組む「性教育」

とりわけ若年者にとって、「性」は身近かつ重要な問題です。性感染症、性の逸脱行動、望まない妊娠などが社会問題となる中、性教育の必要性がひときわ高まっています。その担い手として、「家庭」での両親や「学校」での教師・保健の先生がよく挙げられますが、命や生殖と関わりの深い「看護師」、「助産師」もその一翼を担うことが期待されています。

現在、天使大学の看護学科、大学院助産研究科では、学生が「性教育」に取り組んでいます。実効性の高い「ピア・カウンセリング」、「ピア・エデュケーション」などの手法を取り入れながら、「看護師」、「助産師」、あるいは「同世代」だからこそできる性教育の可能性を探っています。

性教育に関する養成講座・模擬講義を通して感じたこと
――「看護師」が行う性教育の可能性

看護学科2年　片岡　朝美

同年代の私たちだからこそできる性教育

私は昨年の夏に思春期ピアカウンセラー養成講座に参加しました。この講座では、ピア活動の必要性や思春期の人々に対して、同年代の私たちが性教育を行うことの意義などを学びました。参加して感じたことは、今まで自分が受けてきた性教育は一方通行で、本当に基本的な知識を詰め込まれただけのものであったこと、性に関する問題が発生したときにその知識を応用して問題解決をすることが困難だということでした。

発表は真剣勝負。さまざまな媒体を作成して「性」をわかりやすく伝えます

「ピア」が行う性教育活動は〝正しい知識・スキルを共有し合うこと〟を基本とした仲間教育で、誤った情報に振り回されている仲間に共感・共有しながら、性に関する問題を対処できるように支援するものです。その支援を行うのは思春期にある人たちの身近な存在で、仲間意識を持ちやすい同年代の私たちです。この講座で学んだことを活かし、母性看護学の授業の中で「性感染症」をテーマにした模擬講義を行いました。模擬講義の中では、性感染症に対する正しい知識を提供すると同時に、なぜ感染してしまうのか、感染しないためにはどうすればよいのかを一緒に考えながら展開していきました。その中で、性感染症予防ができるコンドームの正しい使い方について模型を用いて実施しました。実際にコンドームスキルを行ってみると「そんなことするの？」「知らなかった」という反応が返ってきました。この反応を受け、模擬講義を行い感じたことは、冒頭でも述べたように知識があってもそれを実践することは困難であるということでした。

この養成講座や模擬講義などを通して、性教育の重要性を改めて感じました。また、性教育を行うのは学校の教員や保健室の先生だけではなく、正しい知識を持つ人であれば誰でもいいのだということも実感しました。「ピア」という考え方を取り入れ、さまざまな世代に性教育を行うことができるのは「看護師」ではないかと私は考えます。同世代間で性教育を行うということはなかなか困難ではありますが、看護師と対象者が正しい知識・スキルを共有しあうことは可能だと思います。看護師を目指す学生が性教育に取り組む意義はそこにあるのではないでしょうか。

※ ピア(peer)……社会的・法的に地位の等しいもの、対等者、仲間、同僚の意味

▶「母性看護学概論」では、「性」を多角的に考察し、発表しました

看護学科における「性」に関する授業展開
――命を見つめる看護師を育てる中で

看護学科助教授　佐藤　昇子

『性』に関するさまざまなトピックスをテーマに授業を展開

若者たちの関心が高い『性』の問題は、2年次後期の「母性看護学概論」の中で、女性の性・男性の性の発達と課題を、性の危機と健康問題との関連から考察します。ゼミに入る前の準備として、「性差」、「性アイデンティティ」、「生殖をめぐる科学と人間関係」などについての講義を行い、学生たちは男女を取り巻く性と生殖についての問題意識を培っていきます。

ここ数年で、若者たちの性に対する考え方は大きく変わり、今や性行為は以前より身近な存在となっています。しかし、性行為は命を決定する重要な場面であり、その場面で、女性として自分の考えをきちんと表現できる立場にあるか、そうしたことを学生に問いかけ、性の問題を人権や個人の生き方の問題として捉えてもらうことが授業の大きな目的です。今年は、性教育のピア・カウンセリング養成講座に参加した学生による、性感染症予防の模擬講義を実施し、具体的な指導方法が見え、反応としては性に対する関心を非常に高めていました。

模型等を駆使したプレゼンテーションの資料を作成し、ゼミ学習へ

ゼミはグループ単位で行われ、学生たちはパワーポイントや模型等を駆使して発表します。テーマについては、「性教育」に関わることが必須で、その他はグループごとに興味あるものを選択します。今年は、避妊、性同一性障害、ドメスティック・バイオレンス、セックスレス、売買春、性行動とコントロール、セクシュアル・ハラスメント、ライフサイクルとセクシュアリティ等、多岐にわたっていました。いずれも、根底には、性をどう捉え生きるか、そのための教育と支援の必要性について、討議されました。そこでは、「性についてこれほど真剣に語ったことはない。中学校・高校での性教育は男女別で、お互いの理解につながらなかった」等、家庭と学校で受けた性教育の不十分さを訴え、思春期・青年期だけではなく、各ライフステージにおいて、性の健康と生き方に関する教育の必要性を指摘していました。プレゼンテーションと討議は、学生にとって各自の性と向き合うよい機会となったようでした。

『性』をどう捉えるかによって、看護師として差が出てくるのは当然のことで、ここでの学びは、看護の現場で必ず活かされるはずです。命を見つめ、人間を見つめる眼を養うのが天使大学の教育方針であり、援助交際など、『性』を取り巻くさまざまな問題を通じて、社会のあり方そのものを問いただすのも天使の「性の学習」と言えるでしょう。

特集 性教育

助産師として「心を育てる」性教育がしたい
――「助産師」が行う性教育の可能性

大学院助産研究科2年　三浦　和恵

ピア・エデュケーションで生徒の自発性を促す

大学院助産研究科では2年次になると、性教育を選択して学ぶことができます。実際に中学校・高校・大学に出向いて性教育を実施します。2006年度は5回にわたり、性教育の授業を行いました。具体的には、事前に各学校に出向いて綿密な打ち合わせを行い、それをもとにプログラム構成や媒体教材の作成等をしていきます。

2006年12月12日、助産研究科の院生が中心となって、看護栄養学部の学生を多数集めて性教育の「ピア・エデュケーション」を行いました。

私たちが性教育を実施する上で一番大切にしていたことは、「講義型」の授業ではなく、みんなで楽しく学ぶことができる「参加型」にすることでした。そこで、私たちが注目したのが「ピア・エデュケーション」です。参加生徒との会話の中で、経験や価値観を共有していき、生徒が自分自身の「性」の問題を自発的に解決できるようサポートしていきます。生徒と関わっていく中で強く感じたことは、一人ひとりがとても純粋で、私たちが思っている以上に「性」について真剣に考えているということでした。また、生徒からの感想は「いろいろな人の意見が聞けてよかった」等、おおむね好評でした。同じ目線で語り合いながらお互いに学びを深めることができる「ピア・エデュケーション」の果たす役割はとても大きいと実感しました。

助産師としての性教育を考えた時、私は「心を育てる」ことを大切にしたいと思います。一度しかない自分の人生なのだから、性に関する判断を求められる場面で、後悔しない自己決定ができる「心のたくましさ」を持ってほしい、また、相手も自分もともに大切にできるようになってほしいと願っています。最近は、友達や家族の命を粗末に扱うような事件が増えています。「心を育てる」ことは、今後さらに重要視されるのではないでしょうか。

性教育に関しては慎重な意見が多い中、各学校では「教員」や「保健室の先生」が性教育を担っており、まだまだ助産師が活躍している状況とは言えません。しかし、各学校と打ち合わせをしていく中で、助産師としての視点や妊娠・出産などの現場を知る助産師の経験が強く求められていることを知り、性教育における助産師への期待は非常に大きいと感じました。性教育の指導は共同作業であると言われています。助産師をはじめとして、学校、地域、家庭、施設などが連携し、性教育がよりよいものに発展していくように、私自身もその役割を担っていきたいと思っています。

ピア・エデュケーションとは?

ピア・エデュケーションとは、同年代または所属を同じくするグループが、情報や知識・価値観・スキル・行動を分かち合うことであると定義されています。受講生と同じ目の高さで、カウンセリングマインドを持った仲間（ピア）が、堅苦しくない雰囲気の中で重要な情報を普及・啓蒙していきます。

ピア・カウンセリングとは?

従来の性教育は、一方通行に知識を伝えるアプローチが主流でした。しかし、知識を提供するだけでは、その人が長年培ってきた生活習慣や認識を変えるのは非常に困難であることから、「ピア・カウンセリング」と言う、職業や障害や年代など同じ立場にある仲間（ピア）同士が援助・助言を与え合うアプローチが性教育の分野で評価されてきました。

仲間意識を持った者同士が性の悩みを共感・共有し合い、性に関する正しい知識・スキル・行動を身に付け、その者が自己決定できるように支援することがねらいです。

助産研究科の院生が北星学園女子中学校で行った性教育の「ピア・エデュケーション」が北海道新聞に取り上げられました（2006年12月26日掲載）

天使大院生が出前講座

性教育　友達感覚で

映像や経験交え率直に

教える・学ぶ

若年者の「性の自己決定」を可能とするために
――「ピア・エデュケーション」という手法

大学院助産研究科教授　大石　時子

べき論を教え込むのではなく自己決定能力を育む

大学院助産研究科の「性教育特論演習」では「ピア・エデュケーション」の手法を取り入れています。「ピア・エデュケーション」とは、中学校や高校、大学等で性教育を実践する際、講義形式による授業ではなく、中高大学生と年齢の近い〝身近な存在〟として院生がファシリテーター（まとめ役）となり、参加型のグループワークを中心に展開する方法です。

中高生等は身近な存在の院生と本音で話し合うことにより、性を日常生活の中にある自分の現実的な問題として捉えることができます。このような方法で、ピア・エデュケーションは実際に問題に直面した時、〝使える〟〝本物〟の性教育となることができます。ピア・エデュケーションの最終的な目的は、若年者に「自己決定能力」を身につけてもらうことだと言われています。

若年者の望まない妊娠や性感染症罹患予防が、さまざまな性教育論議にも関わらず、効果を発揮してこなかった現実がある中、若年者が自分の問題について自己決定し問題解決する能力をつけることは効果的であると期待されています。大人が若年者に〝べき論〟を教え込むのではなく、若年者自身が自己決定する能力を身につけていくということは、性教育だけに限らず、若年者のあらゆる生活面において必要であると言えます。犯罪や自殺等、子供を取り巻く社会環境が劣化している中、自分の人生を主体的に生きていく姿勢を育むことはこれからさらに重要となります。

女性に寄り沿った性教育は助産師ならでは

助産師は、命を育み誕生に立ち合い、そして子育てを支援する存在として、一人ひとりの命の重さを十分に知っています。それは助産師の行う性教育を特徴づけます。しかし、助産師の行う性教育は、自己決定能力をもつ主体的な女性を育てる、という点に関しても一貫しているべきです。女性が一生を通じて自分の体や出産について自己決定しなければならない局面は多々あるからです。助産師という言葉の本来の意味はBeing with Women＝女性と共にある、という意味です。女性が家族や社会の中で生活している生身の現実を捉え、女性をどのように支援していくかを考えるのが、助産師の行う性教育のもう一つの特徴であるべきだと私は考えています。

戴帽式

戴帽式は新たなスタートライン

キャンドルにともる決意の炎。周りの木々や吹く風から冬の訪れを感じ始めた11月24日(金)、本学体育館において戴帽式が執り行われました。看護学科2年生は凛(りん)とした空気の中、声をそろえて「誓いの言葉」を述べ、教職員・家族・上級生・下級生はそれを暖かいまなざしで見守りました。

看護学科2年
佐藤　真奈
長野　睦

私たちは戴帽式を通じて、自分の中での「看護」への思いの変化に気付くことができました。

1年生のときは、ただ授業や課題をこなしていくだけの受け身の姿勢で学生生活を送ることが多く、戴帽式について考えることはほとんどありませんでした。しかし、2年生は1年生の時と比較して授業内容も専門的になり、改めて「自分たちは看護を学んでいる」と実感し、看護師に一歩ずつ近づいていく喜びを感じました。

戴帽式の1ヶ月前に「基礎看護学臨地実習Ⅱ」があり、私たちは実際に患者さんを受け持ってさまざまな壁にぶつかりましたが、その中で自分の未熟さや看護の奥深さを感じ、多くを学ぶことができました。この実習があったからこそ、私たちは戴帽して看護の道を歩むことへの決意がより強くなりました。実習が終わってからも行事や授業が忙しく、練習時間も十分に取れずに初めは「戴帽の歌」も「誓いの言葉」もばらばらでした。しかし、空き時間、朝、放課後の練習を通して徐々に2年生全員が一つになっていき、みんなそれぞれ戴帽に対する決意を強くしているように見えました。

私たちは、喜びと決意を胸に戴帽式当日を迎えました。ステージの上でナースキャップを受け取った時、今までの学習が実ったといううれしさの反面、人の命に関わる看護師という職業の重みも改めて感じました。

私たちがこうしてキャップを頂くことができたのも、友人や家族、そして先生方の温かい支えがあってのことであり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。今後は、この戴帽式での思いを忘れずに、ただ喜びで終わらせることなく、新たなスタートラインに立った気持ちで看護を学んでいきたいと思います。

大学院看護栄養学研究科主催の研修会『ターミナルケアにおける効果的なコミュニケーション』が開催されました

2007年1月13日(土)に、天使大学大学院看護栄養学研究科主催の研修会『ターミナルケアにおける効果的なコミュニケーション』が開催されました。土曜日にも関わらず、北海道各地の病院等から総勢179名の医療職者が集まりました。参加者の多くは看護師でしたが、作業療法士や医師の参加もあり、ターミナルケアにおけるコミュニケーションに対する関心の高さをうかがわせた研修会となりました。今回の研修会は、本学大学院看護栄養学研究科の教授であるデボラ・シャーマン博士(写真上)と季羽倭文子教授(写真右下)のコラボレーションで、アメリカと日本という文化の垣根を超えてコミュニケーションの重要性が伝えられました。シャーマン博士からは、主に悪い知らせをどう告げるかに関する面談の手順や技術についてロールプレイを交えながらお話をいただき、アメリカにおける緩和ケア上級実践看護師の実際を垣間見ることができました。また季羽教授からは、看護の現場では基本はわかっていてもうまくいかなくて悩んでいることが多いという現状を踏まえ、看護の臨床に活かせるポイントについて、アニメーションを駆使したパワーポイントとともにお話をいただきました。お二人の先生からは、「いつも自分の素直な感情を大切にしながら、患者さまやご家族の揺れ動く気持ちに沿っていきましょう」というメッセージがあったように感じました。

(大学院看護栄養学研究科講師　小島　悦子)

卒業をむかえて

天使で出会った仲間は一生の宝物です

看護学科4年　松倉　朋美

私たち4年生もいよいよ卒業を迎えようとしています。振り返るとこんなにも早く過ぎてしまったのかという驚きと、こんなにもたくさんの事を経験できたという満足を感じています。

天使大学で4年間を過ごしてきた今、ともに過ごしてきた仲間の存在の大きさを感じています。例えば毎年行われる合唱コンクールは、みんなでひとつの事に取り組む素晴らしさを教えてくれました。4年生になってからは、統合継続看護臨地実習、国家試験対策など毎日忙しく、めげてしまうこともありましたが、仲間の協力やはげましの言葉、頑張る姿に本当に助けられました。「ひとつのことに向かって一緒に頑張っていける仲間」ができたことは、これから社会に出て行く私たちにとって一生の宝物になると思っています。またそんな仲間に出会えたことに、本当に感謝しています。

最後に在学生の皆さんに一言。卒業までは本当にあっという間です。勉強や実習など毎日大変だと思いますが、つらい思い出よりも「やってよかった」という思いの方が必ず強く残ると思います。勉強はもちろんですが、仲間と過ごす時間はかけがえのないものです。大切な仲間と有意義な時間を過ごしてください。

ステップアップセレモニー

自分を見つめ直すいい機会となりました

2006年10月13日(金)、フード&ライフ　ステップアップセレモニーが挙行されました。実習や講義に追われる毎日を送る栄養学科2年生。この式典の時ばかりは心静かに、入学時に抱いていた夢や希望など、自らの原点をもう一度見つめ直していました。今年からキャンドルサービスも取り入れ、「世の光」として人の役に立つ管理栄養士となる決意を新たにしました。

栄養学科2年　加藤　裕美

天使大学に入学して1年半が経ち、私たち栄養学科2年生は、「フード&ライフステップアップセレモニー」の日を迎えました。今年度から、式典の中でキャンドルサービスを行うことになり、きちんとキャンドルに火をともすことができるかとても緊張しました。

2年生の後期は、「給食経営管理論実習Ⅰ」やさまざまな課題に追われ、目の前のやらなければならないことをこなしていくことに必死でした。

式典の中の近藤学長からのお話で「管理栄養士は、給料をもらうために働くのではなく、相手のために自分の持っている知識と技術で奉仕する職業である」という言葉がありました。私は「多くの人の役に立てる管理栄養士になりたい」という夢を持って天使大学に入学しました。近藤学長からのお話を聞いて、私は入学した頃の強い思いに立ち返ることができました。

また、一人ひとりがキャンドルサービスを行い、全員が壇上に整列したときはとてもきれいでした。その光景を見て、この先も多くの人の力になれるよう頑張っていこうという思いを新たにしました。ステップアップセレモニーは初心に戻って自分自身を見つめ直すいい機会となりました。3年生からは学外実習も始まり、ますます忙しくなると思います。しかし、どんな困難があっても、今回の式典を思い出し、乗り越えていきたいです。

卒業をむかえて

卒業をむかえた今、在学生に伝えたいこと

栄養学科4年　髙橋　麻希

大学生活の4年間は本当にあっという間でした。もう卒業だとは信じられません。毎日のようにレポート提出に追われ、辛い1時限目の講義に出席し、とても遠い実習先まで緊張しながら通い、本当に大変な事が多かったですが、今ではすべてが楽しい思い出に早変わりです。

私がこうして4年間頑張ってこられたのは、友達がいたからです。同じ夢を持って学び、辛いことも、楽しいことも共有できたからこそ、この4年間を乗り越えられたと思っています。時には本当にこの道に進んでよいものかとみんなで悩み、その度に膝をつき合わせて朝まで語り合いました。本当に最高の仲間に恵まれたと思っています。

在学生に伝えたいことは、「友達は一生の宝だ」ということです。学生生活は、楽しい事も多いですが、辛い悩みもたくさんあると思います。これから壁にぶつかることが何度もあるはずです。そんな時に頼りになるのは、誰よりも友達だと私は思います。もちろん勉強も大事ですが、この4年間で得るものは知識や技術だけではありません。大切なものは他にもたくさんあります。大学生活はたった4年間しかないのだから、おもいきり楽しんで今を生きてほしいです。

最後に、自分の身を削りながら学費を払い、私を天使大学に通わせてくれた両親に深く感謝します。

牛乳・乳製品利用料理コンクール北海道大会で入賞！

2006年10月5日(木)、札幌市男女協同参画センターにおいて「第27回牛乳・乳製品利用料理コンクール北海道大会」(主催：北海道牛乳普及協会、ホクレン)が行われました。当コンクールは、日本人に不足しがちなカルシウムを多く含む「牛乳・乳製品」を料理に利用し、さらに豊かな食生活を送ってもらうことを目的に毎年開かれています。審査の結果、本学の近藤孝美さん、村尾咲音さん(ともに栄養学科1年)が優秀賞、斉藤望さん(栄養学科1年)が優良賞に輝きました。

北海道やさいbook Part2が完成しました！

2006年8月に、学生サークル「北の食物研究所」が製作協力として携わった、「北海道やさいbook　Part2」がホクレン農業協同組合連合会から発行されました。前回の「葉茎類」に続く今回のテーマは「根菜類、ばれいしょ類、きのこ類」。大根、ばれいしょ、しいたけなどなじみの深い食物について、「北の食物研究所」の学生が綿密に調べ、その栄養価などの特徴を読みやすい筆致で伝えています。また、監修も務めた栄養学科の荒川義人教授による健康講座、北海道野菜マップ、根菜類等を使用したレシピなど読み応えのある企画も満載です。

海外実習

助産研究科2年生がアフリカ・マダガスカルで実習を行いました

2006年10月2日(月)～16日(月)、10月16日(月)～28日(土)の前・後半に分かれ、それぞれ5名の大学院助産研究科2年生が「国際助産学特論演習」として遠くマダガスカルの地で海外実習を行いました。「国際的な視野を持って発展途上国での助産活動に貢献できる能力を育成する」ことが本研究科の教育目標のひとつ。そうした国際的にも活躍できる助産師を目指す大学院生たちは、日本との文化、価値観、助産活動の違いに戸惑いながらも、マダガスカルの豊かな自然やそこに住む人々のおおらかな人間性など、日本では感じえないさまざまなことを感じ、理解し、受け入れていたようでした。

アフリカ大陸地図

助産院での実習を通して見えた医療や文化の違い

大学院助産研究科2年
西野　自由理

助産師になりたいという夢以前に、小学生のときからアフリカに住みたいという強い思いがあった私が当大学院を選んだのも、「国際助産」を学ぶことができるからです。だから、1年生のときからアフリカ大陸の東側に位置する島国マダガスカルでの国際助産学特論演習をとても楽しみにしていました。想像とは違って、アジア系の顔が多いせいか、緑豊かな田園風景によってか、マダガスカルは懐かしさを覚える場所でした。

実習施設のアヴェ・マリア産院では多くの素晴らしい体験ができました。まずは私たちの大先輩であるシスター牧野との出会い。シスターの自由さと柔軟さ、そして芯の強さは、マザー・テレサに通じるパワーを感じました。

実習ではお母さんや赤ちゃん、家族、産院に従事するシスターや准看護学生たちと出会い、妊婦健診や予防接種そしてお産介助などを行ないました。妊婦健診やお産で垣間見えたマダガスカルの助産事情。マダガスカル国内において、この産院は恵まれた環境にありましたが、それでも栄養失調の新生児や死産に出会い、エイズや貧困もありました。紛争が終結したコンゴ民主共和国出身のシスターは、大統領選挙に合わせて祖国へ帰っていきました。日本では聞くことのできない数々のエピソードに触れ、医療や文化の違いをいろいろなところで感じました。私たち院生は、毎日考え、話し合い、自分なりに吸収してきましたが、一方で解決困難な大きな問題にもぶつかりました。

そして、日本の生活を外から見ることで、日本の医療がどれほど恵まれているかを実感しました。マダガスカルは時間の流れがゆったりしていました。自分にとって何が幸せなのだろう？　それを考えたくて、またマダガスカルに帰ってこようと心の中で決めました。

異国でのお産介助は本当に貴重な経験

実習施設アヴェ・マリア産院の皆さんとともに

新連載・第1回

つれづれ考

本学教職員によるリレーコラム

永遠の美の女神

教養教育科助教授　小原　琢

場末の映画館が私は好きだ。暗闇の世界に身を潜めて銀幕の世界に身を委ねる。学生のころ、私は銀幕の高峰秀子に恋をしていた。

女優・高峰秀子の愛称は「デコちゃん」だ。往年の映画ファンなら知らない人はいないだろう。日本映画が最も輝いていた時代に大輪の如く咲き誇った高峰秀子は日本映画の発展と共に歩み、日本映画の衰退と共に銀幕を去った。高峰秀子なしに日本映画は語れない。

そんな高峰秀子の最高傑作は『浮雲』(林芙美子原作)である。戦時下の仏印で幸田ゆき子(高峰秀子)と富岡兼吾(森雅之)は不倫に堕ちる。しかし戦後の日本に二人の居場所はない。切れそうで切れない腐れ縁を続けた幸田ゆき子は屋久島で儚い一生を終える。

この作品で高峰秀子は戦後を生き抜く逞しい女と、甲斐性なしの男に惹かれてゆく哀れな女とを演じきった。彼女のせりふは男に対する愚痴と文句でしかない。しかしそのすべてが人生の深い陰影を刻んでいた。神業だ。この作品を見終えたとき、私にとって高峰秀子は永遠の美の女神アプロディテとなった。

最近、渡辺淳一の『愛の流刑地』が流行っている。だが『浮雲』の芸術世界には足元にも及ぶまい。どうやら私は銀幕の高峰秀子に恋をして、いまだに忘れられないようだ。

◆追記：聖書は人間の善い行為だけでなく、不倫や殺人という悪い行為も語る。悪い行為はアダムとエワの罪に由来し、善い行為はイエスの愛に由来する。映画にせよ小説にせよ、人間の悪い行為を描く作品は多い。この悪い行為の赦しを考えることは聖書を理解するための一助となるのではなかろうか。

今年の体育祭は「きたえーる」で行われました

2006年11月10日(金)、北海道立総合体育センター「きたえーる」において天使大学体育祭が開かれました。今年は会場を、人工芝の「つどーむ」から板張りの「きたえーる」に変更したことでバスケットボールも復活。クラス同士で競い合いながらも"楽しむ"ことを重視した熱戦に、学生・教職員から大きな声援が飛びました。クラス対抗の総合成績は1位看護学科2年、2位栄養学科1年、3位看護学科1年という結果でした。

参加者全員が楽しめる体育祭を目指して

体育祭実行委員長・栄養学科2年　新妻　絵理奈

体育祭当日、メインアリーナでは選手同士の掛け声や応援する仲間の声、そして学生や教職員の方々の笑い声があふれていました。

今年の体育祭は、北海道立総合体育センター「きたえーる」を会場として行われました。天使大学の体育祭の数日前には、バレーボールの世界大会が行われた会場です。競技種目は、バスケットボール・バレーボール・ドッジボール・障害物競走・5人6脚・大玉リレー・綱引き・玉入れで、どの競技もとても白熱して行われました。

体育祭実行委員会が動き出したのは、夏休み前の7月からでした。身体を動かすことが得意な人も、そうでない人も全員が楽しめる体育祭にしようと委員会で何度も話し合いを重ねました。体育祭実行委員として活動する上での一番の悩みは、実習と重なって実行委員全員がなかなかそろわない点でした。しかし、実習でいない人の仕事は手の空いてる人がフォローし合い、順調に準備を進めていきました。また、葦の会や周りの学生の助けもあり、学生同士の思いやりを直に感じることができたと思います。

当日は想像以上に多くの学生の参加があり、皆さんに楽しんで身体を動かし気分転換してもらえたと思っています。

体育祭実行委員長として多くの不安やプレッシャーもありました。しかし、競技中の選手の真剣な表情や友達を応援している学生の笑顔を見ているうちに、気がつくと私も一緒に汗だくになって楽しんでいました。体育祭を通して、多くの人の優しさに触れることができ、本当に感謝しています。

2007年度入学試験状況(2月末日現在)　※(　)は、男子の内数です

◆看護栄養学部　看護学科

試験種別	定員(名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率(受／合)
推　薦	40	66(4)	66(4)	40(0)	1.7
社会人	30	9(2)	9(2)	1(0)	9.0
一　般		347(20)	340(20)	61(2)	5.6
センター利用	10	180(9)	180(9)	20(0)	9.0
総　計	80	602(35)	595(35)	122(2)	4.9

◆看護栄養学部　栄養学科

試験種別	定員(名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率(受／合)
推　薦	45	72(2)	72(2)	45(1)	1.6
社会人	30	4(1)	4(1)	3(1)	1.3
一　般		133(3)	132(3)	47(2)	2.8
センター利用	10	95(5)	95(5)	20(1)	4.8
総　計	85	304(11)	303(11)	115(5)	2.6

◆看護栄養学部　看護学科(3年次編入)

試験種別	定員(名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率(受／合)
一般	15	13(1)	12(1)	8(0)	1.5
社会人		4(0)	3(0)	0(0)	—
総　計	15	17(1)	15(1)	8(0)	1.9

◆看護栄養学部　栄養学科(3年次編入)

定員(名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率(受／合)
5	7(0)	7(0)	3(0)	2.3

◆大学院　看護栄養学研究科看護学専攻

試験種別	定員(名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率(受／合)
前期	4	1(0)	1(0)	1(0)	1.0
後期		2(0)	2(0)	2(0)	1.0
総　計	4	3(0)	3(0)	3(0)	1.0

◆大学院　看護栄養学研究科栄養管理学専攻

試験種別	定員(名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率(受／合)
前期	3	2(0)	2(0)	2(0)	1.0
後期		1(0)	1(0)	1(0)	1.0
総　計	3	3(0)	3(0)	3(0)	1.0

◆大学院　助産研究科助産専攻

試験種別	定員(名)	志願者数	受験者数	合格者数	倍率(受／合)
推薦	15	12	12	11	1.1
前期・一般	20	10	9	8	1.1
前期・社会人		5	5	5	1.0
後期・一般	5	5	5	3	1.7
後期・社会人		1	1	1	1.0
総　計	40	33	32	28	1.1

学生の今後の日程

4／3(火)	入学式
4／4(水)	新入生オリエンテーション
4／5(木)・6(金)	出会いと親睦ゼミ
4／5(木)	前期授業開始
4／18(水)	始業ミサ・イースターの集い・学生総会
5／22(火)	合唱コンクール
6／22(金)・23(土)	天使祭
8／6(月)	主な夏季休暇(～9／7)
9／10(月)	後期授業開始

あなたの声をお聞かせください

天使大学報「天使」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりを目指しています。
ご意見、ご感想、取り上げてほしい話題等ございましたら、下記あて先までお寄せください。

あて先　〒065-0013　北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30　天使大学広報委員会　tel　011-741-1051　fax　011-741-1077

天使大学　看護栄養学部／看護学科・栄養学科
大学院／看護栄養学研究科
助産研究科(専門職学位課程)

第13号　2007年3月30日　発行　天使大学広報委員会　年2回発行(秋、春)
http://www.tenshi.ac.jp